
熱い夜の眠れない話

きみよし藪太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

熱い夜の眠れない話

【Nコード】

N6862M

【作者名】

きみよし藪太

【あらすじ】

眠れない熱帯夜、鳴らない携帯電話と途方に暮れる。
いとしいあの人は妻と子と眠る、だからわたしはお酒を飲みに出かける。

あなたが好き、ただそれだけの話なのに。
熱帯夜はわたしを身の内から焦がす。

あなたが好き、けれどもただそれだけの話。

十二番目の月は明るく、夏の匂いを孕んだ空気は夜を溶かしてしまふ。

昼間低いなり声を響かせていた雷鳴は稲妻の光ごと姿を消し、降らなかった雨は湿気となってすべてを包み込んでいた。

熱帯夜。あれは、何度以上の寝苦しい夜を呼ぶ為の言葉だったのだろう。

あの人を想う夜は、わたしの内側にもうひとつの熱帯夜を産む。想うと寝苦しくて目が冴える、眠たい頭はぼんやりと覚醒したままで、そして幾度も彼を、想ってしまふ。熱い夜、わたしの体内に、もうひとつの夜。

携帯電話が普及した為に、増えたのは不倫と依存だったそうだが、そしてわたしも例に漏れない。個人用のどこでも呼び出せる電話というものは、とても便利で少し悲しい。鳴らない日々に怯えるから今夜は鳴らない携帯電話、わたしはそれを知っている。

知っているけれどそれは切ない、頭が理解していても胸が苦しい時もある。

妻と子の元へ帰ってゆく恋人を、引き止められない夜を泣いても明日があるからと自分を誤魔化して、せめて好きなあの人に笑顔を向けてみたとしても。あの薄っぺらな、それでいて精密で今では写真まで送れるようになってしまった小さな機械が、あれがなければわたし達は関係を持たなかっただろうと想像すると、なんだかひどくつまらなく、どうしようもない気持ちになる。

「不倫とプリンは似ているわよね」

熱帯夜、出掛ける先は馴染みのナイト・カフェで、そこには眠れない人々が集っている。クーラーの効いている室内のはずなのに、わたしの胸はじくじくと熱を籠め、アルコールでは逆に火を付ける

だけになつてしまふ。

「プリンと？ 音の響きだけじゃないの」

馴染みとはいえ知り合いがいる訳ではない店で、わたしはカウンターに座る。従業員のやたらと色が白い女性と、別のカウンターに座る髪の短い女の人とがしている会話に、わたしはそつと耳だけ参加する。

「内容も似てるじゃない、不倫って甘くて脆くて口当たりが良くてもあつという間に食べ尽くしちゃって、結局最後は何も残らない」

「……不倫と一緒にされたんじゃ、プリンも浮かばれないわねえ」

「ひとときの快樂を、両方与えてくれるものって事で」

「そうなのよ、この店のかぼちゃのプリン！ なんであんなに美味しいのかしらね、つい食べ過ぎちゃって、確かにひとときの快樂だったわ、体重落とすの大変で……ああもう、夏だっていうのに」

カンパリオレンジをひとつ、とわたしはオーダーする。

クラッシュアイスのたっぷり入った、逆三角形のグラスにオレンジの櫛切り。甘くて苦くて、この濃いピンクにオレンジを混ぜた飲み物は、まるで恋のような味がする。

もう、夏だというのに。

不毛な恋を、わたしは続けるのだろうか。

あの恋はそう、ひとときの快樂の為のもの。

いつか終わりを告げる、すべての恋もそうなのだけれど。

愛に代わる事のない、ただ消えゆくのを待つだけの恋。

「でも、だからっていつて目の前に出されちゃったらねえ」

「食べちゃうわよね、男もプリンも！」

「美味しいもんねえ」

「不味かったら齧って捨てるわよ、美味しいからタチが悪い」

「あははは、そうそう、せめて目の前に出してくれなければさ、」

細いストローは硬いプラスチックで赤い色をしている。唇にはさみ、吸い上げる、柔らかなオレンジ色のお酒。

「しかし何とも厄介なものだわね」

「あら、最近の恋は不倫ちゃんなの？」

「いやだ、未婚の男よ、妻も恋人もいないはずの男と付き合ってるわよ」

それでも厄介だわ、とカウンターに座っている女性がため息を吐いた。甘い甘い、ため息。

「恋なんてすべてが厄介だわ、そしてそれに関してだけは人間学習が出来ないのよ、いつだって振り回されて、いつだって馬鹿みたいに傷付いて、でも馬鹿みたいに恋焦がれるんだわ」

「素敵ね、今夜は詩人みたい」

「熱帯夜だしね」

眠れないせいよ、眠れない夜の人はみんな詩人よ。赤い唇から零れる言葉達に、わたしは耳を傾け続ける。

ああ、この眠れない夜に、あの人の声が聞けたならいいのに。

せめて、明日の約束でもあれば。

「失礼ですがお客様、よろしければこちらをサービスさせていただきますが」

頬杖とため息を同時にしたら、後ろから声がかかった。黒いギヤルソンエプロンは従業員の目印で、そして何度か顔を見た事がある彼は店長のはずだ。

「木曜日はレディスデイとさせて頂いておりますので、」

「店長、ナンパしないでくださーい、レディスデイなんて勝手に作らないでくださーい」

彼の言葉を遮り、肌の白い女性店員が笑った。カウンターの客も笑い、そうよ私も女なんだからサービスしなさいよ、と言う。

「あちらは気にしないでくださいな、ナンパでもございません、お口に合うと良いのですが」

目の前に置かれたのは、優しい黄色のプリンだった。さっき、会話の中に出てきたかぼちゃの、プリンなのだろう。薄水色のココット型に入ったそれは、生クリームとアメリカンチェリーでシンプルに飾られていて、ブランデーと砂糖を煮詰めたというシロップがか

かっていた。

ありがとう、と小さな声でたどたどしくお礼を口にする、彼はどういたしまして、と姿を消す。お喋りの女達も自分達の会話に戻り、わたしはプリンとカンパリオレンジを目の前に、ひとり空間に取り残される。

それを寂しいと思える人間ならば良かったのに。

ひとりになる事にほっとできる女は、不倫向きの女のような気がしてしまう。ひとりに慣れているのか、慣らされているのかは別としても。

銀色のスプーンを入れると、プリンは思っていたよりも強い弾力でわたしの指先に抵抗を示した。小さく掬い上げると、口に運ぶ。生クリームの強い甘さとは裏腹に、黄色いプリンは淡い味がした。「恋なんて、いつそ知らなければ平穩無事に日々を暮らせるのに」「でも、あれがないと世の中つまないでしょ」

「そうなのよね、そこが問題なのよ、あんなの麻薬と一緒にじゃないの、取り締まりがない分だけ恋の方が始末が悪いわ」

「恋愛してたから逮捕です、って、そんなのあたし嫌だなあ」

舌先で薄く溶けてしまうプリン。

始末が悪い恋心、妻子ある相手なら尚の事面倒だ。

けれども、やめられないのもまた事実で、そしてそれは他人の目にはひどくバカバカしく映るのだろうという事も、わたしは知っていた。

プリンを食べ終えると、少しだけ残っていたお酒を飲み干し、わたしは店を出た。満月に近い月は柔らかな光を放ち、わたしが見上げるこの空の下にあの人は眠っているのだと思うと不思議な気分になる。世界中でひとりぼっちのような気持ちの夜にでも、必ずわたしの恋しい人は、同じ空の下にいるのだ。

軽く酔った頭のまま、低いヒールのミュールでふらふらと帰る。電車も終わってしまった夜に、星が輝いている。

あの人を好きだと思ふ気持ちは確かなもので、目に見えないのに

確かだと信じているのは愚かな事なのではないかと、時々思う。夢に見るのは彼の背中、わたしを抱く時にいつも左の腰からくちづけるその彼の癖で、一緒に沈むバスタブで化粧が崩れるからと怒るのも聞かずにわたしの顔を撫でるその手だ。わたしを見る、彼の目が優しい事を、わたしは信じている。信じているのだけれど、それでも声を聞きたい夜もある。

便利な携帯電話は、けれども逆にしつこくし過ぎる事が容易にできてしまい、嫌われる可能性も共に含んでいるのだ。だからわたしは電話をかけない。かけたい自分をなだめ誤魔化し、そして知らん振りをする。熱帯夜でなければ、暑苦しくて眠れない夜でなければ、今夜も静かに眠れただろうに。

あなたが好き、けれどもただそれだけの話。

彼の家庭を壊す気もない、時々抱いてくれるだけで良い、それだけで、良い。

それでも厄介なのは恋心というやつで、あの人が欲しいと時々狂いそうになる。

あなたが好き、本当に、ただそれだけの話。

熱帯夜は続くだろう、わたしの身の内に飼う熱帯夜は、まるで獣のように意志を持ってわたしを苦しめる。眠れない夜は続く、けれどもそれこそがあの人を愛しいと想う故なのならば。

それを幸せだと想って生きていけるよう、熱帯夜に慣れるしかないのだ、と、生ぬるい夜道をわたしは進む。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6862m/>

熱い夜の眠れない話

2010年10月8日14時10分発行